



KOKUSHIKAN

第5回

国士舘救急救命士会フォーラム

KOKUSHIKAN

日 時：2026年9月12日（土） 13:00～16:50

開催形式：対面およびリアルタイムウェブ配信

参加費：無 料（事前申し込み制）

共 催：国士舘大学体育学部スポーツ医科学科
国士舘大学体育・スポーツ科学学会



2026.9.12 SAT

国士舘大学多摩キャンパス
25号館 臨床実習室

（最寄駅：小田急/京王永山駅）

参加申し込み

QRコードを読み取り
登録フォームより
申し込みください



Instagram

kokushikan_paramedic ⚙️

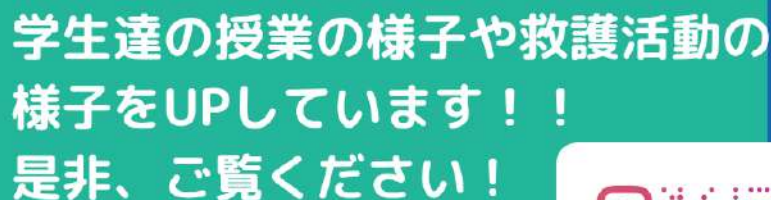
投稿439件 フォロワー4851人 フォロー中205人

国士舘大学体育学部スポーツ医科学科
通称：スポ医

...続きを読む

2068515

www.kokushikan.ac.jp/faculty/pe/departement/mc



**急救士を目指すなら
国士舘大学**

「救命士を目指すなら**国士舘**」**8**つの
「毎日がオープンキャンパス」ってなに？

国士舘大学体育・スポーツ科学学会

第 5 回 国士舘救急救命士会フォーラム

ご挨拶

国士舘大学体育・スポーツ科学学会 会長

国士舘大学体育学部 学部長

古田 仁志



「第 5 回国士舘救急救命士会フォーラム」にご参加いただき、誠にありがとうございます。主催者を代表し、一言ご挨拶申し上げます。

本学部スポーツ医科学科は、2000 年に当時の学部長であられた故・大澤英雄理事長、初代学科主任の故・天羽敬祐先生をはじめ、多くの先生方、関係者の皆様のご尽力のもとに創設されました。日本初の 4 年制大学における救急救命士養成課程として歩みを重ね、現在では 3,300 名を超える卒業生が、消防機関をはじめ、公的機関、医療機関、民間企業など、全国のさまざまな分野で活躍しています。

本フォーラムも今回で第 5 回を迎えました。これまで、在校生、卒業生、そして教員がそれぞれの経験や知識を共有し、交流を深める場として開催されてきました。こうしたつながりが年々広がり、スポーツ医科学科の大切な交流の場として定着してきたことを、大変うれしく感じています。

今回は「卒業生・在校生の今」と題し、厚生労働省、救急救命東京研修所、消防機関、民間企業、医療機関など、さまざまな分野で活躍する卒業生と、学部生・大学院生から発表していただきます。また、「スポ医特別授業」では、本学科の中川洸志先生、長名シオン先生、喜熨斗智也先生による授業も予定されています。

卒業生がそれぞれの現場でどのような経験を積み、国士舘での学びをどのように生かしているのか。そして、在校生が今何を学び、どのような未来を描いているのか。世代や立場を越えてお互いの「今」を知ることが、これからのスポーツ医科学科にとって大きな財産になるものと思います。

時代とともに救急救命士に求められる役割も広がっています。そのような中だからこそ、卒業生と在校生、教員がつながり、知識や経験を共有し、次の世代へ伝えていくことがますます大切になっていると感じています。

本フォーラムが、情報共有の場にとどまらず、新たな出会いやつながりを生み、卒業生にとっては母校との絆を改めて感じる機会に、そして在校生にとっては自らの将来を考えるきっかけとなることを期待しています。

本日の交流と学びが、国士舘大学スポーツ医科学科のさらなる発展と、救急救命の未来を担う人材の成長につながることを心より願っております。

プログラム

■ 開 会

13:00

牧 亮（国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 主任）

■ スポーツ医科学科の最新動向

13:05～13:15

張替 喜世一（国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授）

■ 卒業生・在校生の今

13:15～14:45

司 会：高橋 宏幸（国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 教授）

演者：

1. 「救急救命士が中央省庁で働く ―現場経験を制度・政策へ―」
作山 洋貴（厚生労働省 医政局 地域医療計画課：スポーツ医科学科 13 期卒）
2. 「消防職員への救急救命士教育について～ELSTA 教官の立場から～」
小山内 健介（弘前地区消防事務組合（救急救命東京研修所）：スポーツ医科学科 2 期卒）
3. 「卒業生の今 消防のリアル」
岡澤 あゆみ（佐倉市八街市酒々井町消防組合消防本部：スポーツ医科学科 4 期卒）
4. 「救急救命士の資格を活かす ～医療機器営業という選択～」
平沼 真衣（フクダ電子東京西販売株式会社：スポーツ医科学科 11 期卒）
5. 「救急救命士として、どんなキャリアを歩むのか～病院救命士 14 年以上の経験から～」
平手 友理（河北総合病院：スポーツ医科学科 9 期卒）
6. 「大学院での学びと経験」
阿部 和（国士舘大学大学院救急システム研究科修士 2 年：スポーツ医科学科 22 期卒）
7. 「国士舘大学だからできた経験、そして学び」
三矢 春奈（国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 4 年：24 期生）

プログラム

■ 休憩 14:45～15:00

■ スポーツ医特別授業 15:00～16:00

司 会: 坂梨 秀地(国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 講師)

演者:

1. 「国土舘から世界に発信！救急救命士がエビデンスを創る」
中川 洸志(国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 講師)
2. 「基礎研究から広がる教育と研究—解剖実習と大学院研究への展開—」
長名 シオン(国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 准教授)
3. 「救急救命士の処置拡大の現状と2040年問題を見据えた役割の将来像」
喜熨斗 智也(国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 教授)

■ 休憩 16:00～16:15

■ スポーツ医科学科優秀学生(GPA3.5以上)表彰式 16:15～16:35

プレゼンター: 牧 亮(国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 主任)

■ 閉会 16:35～16:40

スポーツ医科学科の最新動向

スポーツ医科学科の最新動向

張替 喜世一（国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授）

～略歴～

1978 年 横浜市消防局 入局

1995 年 救急救命士資格 取得

2007 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 講師

2011 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 准教授

2018 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 教授

国士舘大学大学院 救急システム研究科 教授



～実績紹介～

横浜市消防局における長年の実務経験を基盤として、病院前救急医学、病院外救急医療システム、救急医学教育を専門としている。また、救急救命士教育をはじめ、MCLS や JPTEC などの標準化教育にも幅広く携わり、豊富な現場経験を生かした教育・人材育成を通じて、病院前救急医療の発展に貢献している。

【学科紹介】

2000年4月		● 救急救命士を養成する 日本で初めての4年制大学の学科として設立
2004年4月		● 大学院スポーツシステム研究科 救急救命システムコース設立
2010年4月		● 大学院救急システム研究科設立
2013年4月		● 博士課程設立

総卒業生数	救急救命士 国家資格取得者数	消防就職者数
 3,395人	 2,781人	 1,649人
		

卒業生・在校生の今

司 会: 高橋 宏幸(国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 教授)

演者:

1. 「救急救命士が中央省庁で働く ―現場経験を制度・政策へ―」
作山 洋貴(厚生労働省 医政局 地域医療計画課:スポーツ医科学科 13 期卒)
2. 「消防職員への救急救命士教育について～ELSTA 教官の立場から～」
小山内 健介(弘前地区消防事務組合(救急救命東京研修所):スポーツ医科学科 2 期卒)
3. 「卒業生の今 消防のリアル」
岡澤 あゆみ(佐倉市八街市酒々井町消防組合消防本部:スポーツ医科学科 4 期卒)
4. 「救急救命士の資格を活かす ～医療機器営業という選択～」
平沼 真衣(フクダ電子東京西販売株式会社:スポーツ医科学科 11 期卒)
5. 「救急救命士として、どんなキャリアを歩むのか～病院救命士 14 年以上の経験から～」
平手 友理(河北総合病院:スポーツ医科学科 9 期卒)
6. 「大学院での学びと経験」
阿部 和(国士舘大学大学院救急システム研究科修士 2 年:スポーツ医科学科 22 期卒)
7. 「国士舘大学だからできた経験、そして学び」
三矢 春奈(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 4 年:24 期生)

卒業生・在校生の今

1. 「救急救命士が中央省庁で働く ―現場経験を制度・政策へ―」

作山 洋貴（厚生労働省 医政局 地域医療計画課:スポーツ医科学科 13 期卒）

私は大学卒業後、埼玉医科大学国際医療センターに救急救命士として勤務し、救急医療の現場に携わってきました。その後、埼玉医科大学医学教育センターにおいて教育・研究業務に従事し、現在は人事交流により厚生労働省医政局で救急医療行政を担当しています。

救急医療と聞くと、救急車や救命救急センターなどの現場を思い浮かべる方が多いと思いますが、その背景には制度設計や予算措置、人材育成、関係機関との連携など、医療を支える様々な行政の取組があります。

本講演では、現在携わっている厚生労働省における救急医療行政の業務を中心に、救急医療体制の整備、救急救命士に関する制度の検討などの取組について紹介します。
あわせて、救急救命士としての臨床経験や大学教員としての教育経験にも触れながら、現在の業務やキャリアを振り返り、医療を支える多様な働き方や進路について考える機会となれば幸いです。

2. 「消防職員への救急救命士教育について ～ELSTA 教官の立場から～」

小山内 健介（弘前地区消防事務組合(救急救命東京研修所):
スポーツ医科学科 2 期卒）

大学卒業後、地元の消防機関に就職してから20年が経過しました。救急隊として現場活動をしてきた中、2011年に東日本大震災が発生しました。その後2017年から消防本部に異動し組織的に救急業務を取りまとめる立場に従事しました。2020年には新型コロナウイルスによるクラスターが発生し、保健所をはじめとする行政機関や医療機関と連携して対応しました。2023年に指導救命士認定を受けた後、2025年4月から救急救命東京研修所(以下、「研修所」。)の教官として全国から集まる消防職員に対し救急救命士国家資格取得のための教育指導をしています。現在自分が研修所で指導している内容を紹介すると共に、全国の消防本部から派遣されて教育指導に従事する教官と日常的に共有していること(特に救急救命士に関する法的規則や教育、指導の方向性)について紹介したいと思います。そして消防職員に勤める救急救命士として常に考えていること、今後の救急救命士のあり方についてお伝えしたいです。

卒業生・在校生の今

3. 「卒業生の今 消防のリアル」

岡澤 あゆみ（佐倉市八街市酒々井町消防組合消防本部：
スポーツ医科学科 4 期卒）

私の勤務する佐倉市八街市酒々井町消防組合は、幕張メッセがある千葉市と成田国際空港がある成田市の間に位置し、職員 412 名、うち女性職員 20 名が勤務しています。広報活動も盛んで、フジテレビ系列の「コード・ブルー」の消防監修に参加しました。また、2021 年 10 月号の『近代消防』では日本医科大学千葉北総病院と表紙を飾り、私も紹介記事を執筆しました。令和 4 年には、当組合初の「さくら女子インターンシップ」を開催し、30 名が参加しました。

大学時代は、先生方や先輩、志の高い仲間にも恵まれ、国家試験の勉強はもちろん、BLS 指導、マラソン救護、東京 DMAT 訓練など、多くの経験をさせてもらいました。目の前にいる人に自分が何かをして感謝されることにやりがいを感じた経験が、今の原点です。私の信念は「現場最前線で活躍すること」。救急救命士として働き始めて 20 年、この気持ちを貫いてきました。傷病者本人や家族からの「ありがとう」は、次への活力となっています。

当組合は 2 交代制で、非番を含め自分の時間が多く、趣味や勉強、旅行なども楽しめます。男性の育児休業や特別休暇も取得しやすく、女性も働きやすい環境です。志の高い学生が一人でも多く、救急救命士の資格を活かしてさまざまな職域で活躍してほしいと願っています。

4. 「救急救命士の資格を活かす ～医療機器営業という選択～」

平沼 真衣（フクダ電子東京西販売株式会社：スポーツ医科学科 11 期卒）

私は 2014 年に国士舘大学を卒業し、救急救命士の資格と保健体育の教員免許を取得しました。卒業後は医療機器を取り扱う企業に就職し、現在まで約 12 年間、医療機器営業として医療現場に携わっています。

医療機器営業は、医療機関を訪問し、医師や医療スタッフの方々から現場の課題やニーズを伺い、それぞれの施設に適した医療機器の提案から導入後のサポートまでを行う仕事です。さまざまな医療現場に関わる中で、大学で学んだ救急・医療に関する知識や、救急救命士を目指す中で身につけた経験が活かされていると感じる場面も多くあります。

本講演では、私自身の進路選択や現在の仕事内容、会社についてお話しします。救急救命士の資格や大学での学びを活かせる道は一つではありません。皆さんが将来の進路を考える際に、自分らしく医療に関わるための選択肢を広げるきっかけとなれば幸いです。

卒業生・在校生の今

5. 「救急救命士として、どんなキャリアを歩むのか ～病院救命士 14 年以上の経験から～」

平手 友理（河北総合病院:スポーツ医科学科 9 期卒）

救急救命士には、消防、病院、民間企業など、さまざまな働き方があります。私は在学中の実習を通して、「急性期からその後の転帰まで、一貫して患者さんに携わりたい」という思いを持ち、病院救命士の道を選びました。現在は二次救急病院に勤務し、病院救急車の運用をはじめ、院内外におけるさまざまな業務に携わっています。これまで複数の病院で勤務する中で感じてきたのは、「病院救命士」という仕事には、まだ決まった答えがないということです。病院救急車による転院搬送業務、救急外来における診療補助、災害医療など、その役割は病院によってもさまざまです。だからこそ、自分たちで考え、必要な仕事をつくっていけることが、病院救命士の大きな魅力の一つだと感じています。どこに就職するかを考えることももちろん大切ですが、その先に「自分はどんな仕事がしたいのか」「救急救命士としてどのようなキャリアを歩みたいのか」を考え、自分自身のライフスタイルに合わせて主体的に行動していくことも大切だと思います。これから進路を考える皆さんにとって、救急救命士として自分自身のキャリアを考える一つのきっかけとなれば幸いです。

6. 「大学院での学びと経験」

阿部 和（国士舘大学大学院救急システム研究科修士 2 年：
スポーツ医科学科 22 期卒）

救急システム研究科に入学してから、約 1 年半が経過しました。大学院という環境でさまざまな経験を積み、まだ見たことのない世界を見てみたいという思いから、進学を決めました。

大学院では、「臨床・教育・研究」の 3 領域で経験を積むことを意識してきました。臨床では、病院救命士として初療室やドクターカーで活動するとともに、救護活動を通して、プレアンビュランス、プレホスピタル、院内における救命士の役割を学び、教育では、ティーチング・アシスタントとして実習に携わり、BLS や FA の講習会では、さまざまなバックグラウンドを持つ方を対象とした教育の面白さを実感しました。研究では、全国規模のデータを用いた研究に取り組み、学会発表や論文執筆を経験しました。また、研究成果が学生のレポートや BLS 講習会で活用され、研究で得られた知見が教育や実践につながることも実感しました。これらの経験から、大学院は研究だけを行う場所ではなく、自らの興味や将来像に応じて必要な経験を積み、挑戦できる環境であると感じています。

本発表では、スポーツ医科学科の卒業生、そして大学院生という立場から、大学院での経験や学びを共有させていただき、在校生や高校生のキャリアアップの一助になれば幸いです。

7. 「国士舘大学だからできた経験、そして学び」

三矢 春奈（国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 4 年：24 期生）

国士舘大学スポーツ医科学科では、救急救命士に必要な知識や技術だけでなく、プールや海、河川、雪山での遭難救助実習、アメリカの救急医療体制を学ぶ海外実習など、さまざまな環境で学ぶ機会があり、状況に応じて判断し行動する力を養うことができます。また、東京消防庁で救急隊長としての現場経験豊富な先生方から直接指導を受けることで、教科書だけでは得られない現場での考え方を学びました。

さらに、マラソン大会などのスポーツイベント救護にも携わり、傷病者への対応だけでなく、周囲を見て連携する大切さを実感し、縦のつながりが強い環境で、先輩から受け継いだものを後輩へ伝え、自分自身の学びも深まりました。一歩踏み出すことで得られる経験が、成長につながったと感じています。

就職活動では、消防官として管理職を経験した先生方から、小論文や面接の指導を受け、自分の考えを的確に伝える力を磨くことができ手厚い支えを受け就職試験に臨むことができました。大学で得た一つ一つの経験と学びは、今の自分を支えるかけがえのない力となっています。これからも、仲間や先生方とのつながりを大切にしながら、学び続ける消防官を目指していきたいです。

スポ医特別授業

司 会: 坂梨 秀地 (国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 講師)

演者:

1. 「国土舘から世界に発信！救急救命士がエビデンスを創る」
中川 洸志 (国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 講師)
2. 「基礎研究から広がる教育と研究—解剖実習と大学院研究への展開—」
長名 シオン (国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 准教授)
3. 「救急救命士の処置拡大の現状と 2040 年問題を見据えた役割の将来像」
喜熨斗 智也 (国土舘大学体育学部 スポーツ医科学科 教授)

スポ医特別授業

1. 「国士舘から世界に発信！救急救命士がエビデンスを創る」

中川 洸志(国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 講師)

～略歴～

2018 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 卒業(15 期生)

2020 年 国士舘大学大学院 救急システム研究科 修士課程修了

2023 年 国士舘大学大学院 救急システム研究科 博士課程修了

2024 年 中央大学 理工学部 人間総合理工学科 助教

2026 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 講師



～実績紹介～

救急救命学、臨床疫学、因果推論を専門とし、院外心停止や溺水、AED 使用など、病院前救急医療に関する研究に取り組んでいる。大規模データを用いた疫学研究や因果推論を通じ、救急現場で行われる処置の効果を科学的に検証し、より良い救急医療の実現を目指している。

2. 「基礎研究から広がる教育と研究 —解剖実習と大学院研究への展開—」

長名 シオン(国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 准教授)

～略歴～

2013 年 電気通信大学 電気通信学部 知能機械工学科 卒業

2015 年 東北大学大学院 医学系研究科 障害科学専攻 修士課程 修了

2019 年 東北大学大学院 医学系研究科 医科学専攻 博士課程 修了

2022 年 東北大学大学院 医工学系研究科 助教

2023 年 日本学術振興会 特別研究員 PD

2026 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 准教授



～実績紹介～

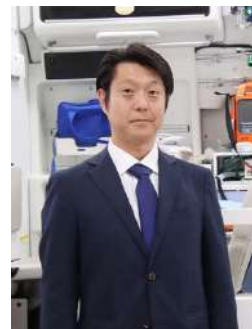
分子細胞生物学・スポーツ科学を専門とし、特に骨格筋の維持・再生、筋萎縮・筋肥大の分子メカニズムについて研究。科研費「若手研究」を研究代表者として継続的に獲得しており、サルコペニアやフレイル予防への応用を見据え、基礎医学とスポーツ科学を融合した研究・教育を展開している。

3. 「救急救命士の処置拡大の現状と 2040 年問題を見据えた役割の将来像」

喜熨斗 智也(国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 教授)

～略歴～

2005 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 卒業(2 期生)
2007 年 国士舘大学大学院 スポーツ・システム研究科
救急救命システムコース 修士課程 修了
2007 年 国士舘大学大学院 スポーツ・システム研究科 研究科助手
2010 年 国士舘大学大学院 救急システム研究科 研究科助手
2012 年 国士舘大学防災・救急救助総合研究所 準職員
2014 年 国士舘大学体育学部こどもスポーツ教育学科 助教
2017 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 助教
2018 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 講師
2021 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 准教授
2026 年 国士舘大学 体育学部 スポーツ医科学科 教授



～実績紹介～

救急救命士。博士(救急救命学)。救急救命学およびマスギャザリング医学を専門とし、市民マラソンにおける救護・AED 体制の構築について長年にわたり研究に取り組んでいる。その研究成果は『The New England Journal of Medicine』にも掲載されるなど、国内外に広く発信されている。また、救急救命士教育に関する著書・論文も多数執筆。『救急救命士標準テキスト 第 11 版』の執筆や JRC 蘇生ガイドライン 2025 の策定に携わるほか、厚生労働省の救急医療に関する各種検討会の構成員を務めている。現在は一般社団法人日本救急救命士会会長を務めるなど、研究・教育・社会実装の各分野で幅広く活動している。



国士舘大学